

古代中国にUFOは飛来していたか？（其三）

— 古典文献の基本的な使い方からの考察 —

明 木 茂 夫

（承前）

五、南京で目撃された光の正体は何だったのか？ 『呉友如画宝』「赤燄騰空」続考

はじめに

拙論「古代中国にUFOは飛来していたか？（其一）」の二、南京で目撃されたUFOの図？」において、清末の『呉友如画宝』「赤燄騰空」を取り扱った。当時人気の絵師・呉友如の作品で、南京市街の南の空に現れた不思議な光を人々がてんでに指さしながらあれは何だと騒いでいる、という図入りの記事である。UFO信者なら、これが当時飛来したUFOの記録だと喜んで飛びつきそうな絵である。

拙論（其一）ではこの「赤燄騰空」について、UFO信者がこれをどう扱っているか、そこに意図的な資料の改竄はないか、などについて検証を試みた。その中で私は、中国のウェブサイトに掲載された「赤燄騰空」図が、いかにもUFOに見えるように謎の光の部分黒々と大きく改竄されていることを指摘した。これに関して北海道大学の武田雅哉氏から、呉友如の絵にはしばしばカラーリングされた蔵本があるというご教授をいただいた。本の所有者が「ぬり絵」のつもりで着色したかあるいはプロに彩色させたのか判別できないが、日本国内の機関に所蔵されている本にもそのように後から着色されたものがある、ということである。だとするとこの書き加えられたUFOの部分はUFO研究者によって改竄されたのではなく、元々悪意無く「ぬり絵」された原本があった可能性もあるわけだ。はたしてこのような大きくぬり絵された原本があったのか、それともUFO関連のウェブサイト制作者によって改竄されたのか、あるいはウェブサイトが基にしたUFO研究雑誌『飛碟探索』の記事が既に改竄を行っていたのか、犯人捜しは現在鋭意続行中である。

これ以外にも「と学会」の方々や中国学の方々から幸いにもこの記事についていろいろな反響をいただいた。私自身もその後さらにいくつか興

味深い事を見出すことができたので、本稿はその続編としていくつか補足を行いたいと思う。⁽²⁾

1、「赤燄騰空」の本文 「天灯」とは何か

ではまず復習を兼ねて、この「赤燄騰空」の内容を再度整理してみよう。この記事全体の影印は【図1】に掲げておいた。⁽³⁾画面の右上にチョンと見えるのが問題の謎の光である。上方の記事本文については拙論（其一）に掲載したが、今一度本文とその訓読を掲げることにする。



図1 中国青年出版社版『吳友如画宝』による

九月二十八日、晚間八点鐘時、金陵城南隅、忽見火毬一団、自西而東、形如巨卵、色紅而無光、飄蕩半空、其行甚緩。維時浮雲蔽空、天色昏暗。拳頭仰視、甚覺分明、立朱雀橋上、翹首跂足者不下數百人、一炊許漸遠漸滅。有謂流星過境者、然星之馳也隣息即杳、此球自近而遠、自有而無、甚屬滯滯、則非星馳可知。有謂兒童放天灯者、是夜風向北吹、此毬轉向東去、則非天灯又可知。衆口紛紜、窮於推測。有一叟云、是物初起時微覺有声、非靜聽之不聞也。係由南門外騰越而來者。嘻、異矣。

九月二十八日、晚間八点鐘時、金陵城の南の隅に、忽として火毬の一団見ゆ。西よりして東し、形は巨卵の如く、色は紅にして光無し。半空に飄蕩し、其の行くや甚だ緩なり。維時浮雲空を蔽ひ、天色は昏暗。頭を拳げて仰視すれば、甚だ分明と覺ゆ。朱雀橋上に立ちて、翹首跂足する者數百人を下らず、一炊許にして漸く遠く漸く滅す。流星の過境するなりと謂ふ者有り、然るに星の馳するや隣息にして即ち杳く、此の球近きよりして遠く、有よりして無、甚だ滯滯に属せば、則ち星の馳するに非ざること知るべし。兒童の天灯を放つと謂ふ者有り、是の夜風は北に向ひて吹く。此の毬轉じて東に向ひて去れば、則ち天灯に非ざること又知るべし。衆口は紛紜として、推測に窮まる。一叟の云ふ有り、是の物初めて起びし時、微かに声有りと覺ゆ。之を靜聽するに非ざれば聞こえざるなりと。南門の外より騰越して來たる者に係る。嘻、異なるかな。

拙論(其一)では口語訳は省略したが、その後できれば日本語訳が読みたいというご意見を頂戴したので、本稿では改めて簡単な訳文を示したいと思う。但しこれを UFO と見るか否かの議論の材料とするため、日本語が不自然になることを恐れずに出来る限り直訳することを旨とした。

九月二十八日の夜八時頃、金陵(南京)の城の南の隅に突然一団の火のたまが現れた。西から東へ動き、形は巨大な卵のようだった。色は赤く光は無し。中空をただよい、その動きはたいへん緩やかである。この時浮雲は空をおおい、空は暗かった。頭を上げて仰ぎ見ると、とてもはつきりとしていた。朱雀橋の上に立って、首をのぼしてつま先立っている人々は數百人を下らず、しばらくするとだんだん遠くなつてだんだん消えていった。ある人が、流星が飛んできたのではないかと言った。しかし星が流れる時は一瞬にして暗くなるものであり、この球は近くから遠くへ動き、有から無となり(有つたものが消えてしまい)、非常にゆつたりとしていた。すなわち星ではないことが分かる。ある人が、子供が「天灯」を飛ばしていたのだと言った。しかしこの夜は風は北に向かって吹き、この球は東に向きを転じて飛んだ。すなわち「天灯」ではないことが分かる。人々は口々に議論したが、それが何なのか推測できなかった。あるおじいさんが言うには、この物が初めて飛んだとき、かすかに音がした気がして、それは静かに聞かないと聞こえないくらいだった。これは南門の外から飛んできた物である。ああ、不

思議なことだ。

ここに出てくる「天灯」というものだが、「夜空に不思議な光が現れた、子供が天灯を揚げているのではなからうか、いや、風とは違う方角に動いたから天灯ではない」という文脈に出てくるわけだから、おそらく凧や風船のようにふんわりと空を飛ぶ、しかも子供にも取り扱えるようなものであったことは間違いないであろう。しかも夜空に現れた不思議な光と見まがう可能性のあるものだから、何か光を発するようなものだったはずである。具体的にはどのようなものだったのだろうか？

調べてみると、現在の中国にも天灯を揚げるという習慣はあるようで、これは一種の小型の「熱気球」なのである。何でも、諸葛孔明が軍隊へ情報を伝達する合図として用いたのがそもその始まりで、孔明灯とも呼ばれていた、あるいは一説では、盗賊を避けて山に避難した村人に既に盗賊が去って安全だということを知らせたものだそうであるが、もつともこれを上手に揚げるには風などの気象条件の影響が大きいので、実際に軍事的に用いられたかどうかは疑問である。

現在地方の元宵節などで揚げられている天灯は竹ひごと薄い油紙でできており、袋をさかさまにしたような形をしている。竹ひごで直径六センチほどの輪っかを作り、その上に烏帽子のような高さ一メートル三十センチほどの油紙の袋をかぶせる。そして底部の竹ひごの輪の中央に小さな燃料を置いて火を点ける。すると熱せられた空気が袋の上方に溜まって浮力を生じ、天灯は幻想的な光をともしながらふわふわと宙に舞い上がる。天灯を揚げる行事を実際に行っている地方のウェブサイトによると、この天灯には揚げる人の願いが込められており、袋の部分に願い事を書いたり、あるいは「学業成就・家内安全・商売繁盛・恋愛成就」などの願い事の種類によって天灯の色が区別されていたりするそうだ。また祭り際にはかなり大型のものが飛ばされることもあるらしい。

さて、「赤燄騰空」に出てくる天灯が現在のものほど凝った作りであったとは思えないが、清末のこの時代に現在の天灯とほぼ同様のものを飛ばす習慣があったと考えても、それほど無理はなからう。この天灯ならば、目撃された不思議な光の正体として持ち出されることに十分な理由がある。本文の記述によればこの謎の光は、卵のような形で、色は赤く、光は発しておらず、中空を緩やかにただよう。これらの特徴は右で見た天灯に間違えられても不思議はない。よってここでは「天灯」をこうしたものだとして解釈しておく。

2、怪光の目撃された日時 太陽暦への変換

さていよいよ、この「赤燄騰空」に描かれた謎の光の正体に迫ってゆくことにしよう。そのためにはどのような方法が考えられるであろうか？もちろん一足飛びにこの光の正体が何であるかを論証するのは難しいであろう。ただその前に確認しなければならぬことがある。夜空に光るも

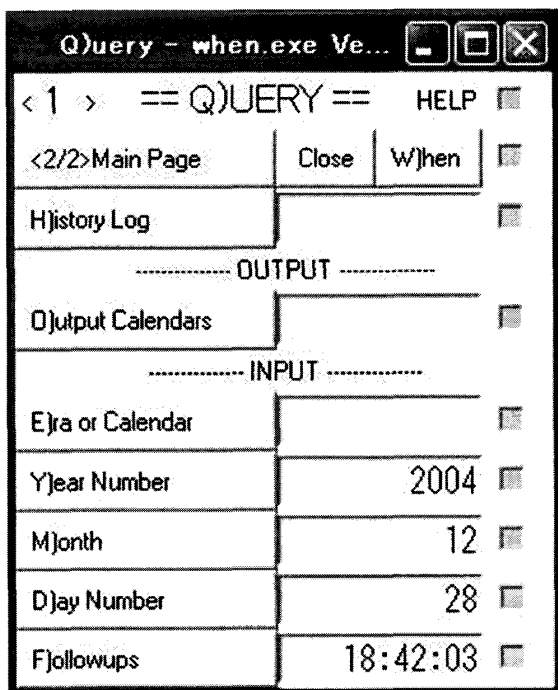


図2

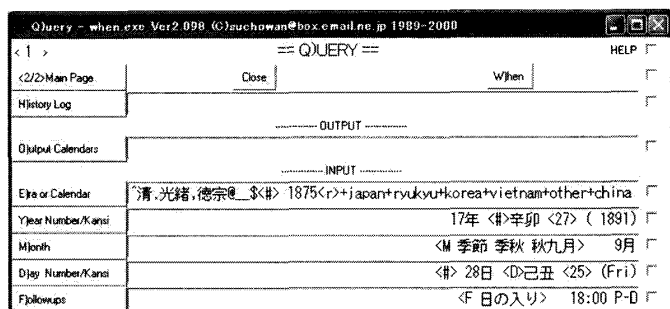


図3

が目撃された場合、まず可能性が高いのは、それが何らかの自然現象ではないか、ということである。さらに最も可能性の高いのは、それが何らかの天体ではないか、ということになるのは当然であろう。つまり別の言い方をすれば、この謎の光がUFOを含め何らかの異常現象や超常現象であるということ論ずるためには、何はさておき先ずこの光が天体などの自然現象ではないことを確認しておかなければならないのである。

そこで思いつくのが、この日、この時間の天体の配置を確認しておくことである。さらにその日の日没の時間など、付随する条件も確認できるに越したことはない。過去や未来のある日ある時刻の天体配置を調べる方法はあるのだろうか？

実は現代の我々には、こうした目的にぴったりの道具があるのだ。そう……。コンピュータの天文ソフト、いわゆるプラネタリウムソフトである！ 幸いなことに、この「赤燄騰空」には事件の日付のみならず、時刻と方角までもが記されている。それならば天文ソフトによってその時の南京の空での天体配置を再現することが可能なはずなのである。このことに思い至った時は興奮を禁じ得なかった。⁵⁾

「赤燄騰空」本文には「九月二十八日晚間八点钟」とある。これが何年の記事なのかについては、武田氏のご教授によると、同じ記事を掲載している『飛影閣画報』が光緒十七年十一月十三日の発行であることからこれを「光緒十七年」の九月二十八日であると判断できる。ところが拙論で何度も取り上げた王矛・王敏共著『中国文化故事物語』⁶⁾及び拙論で右に触れた中国のウェブサイトではいずれもこれを、「光緒十八年」（一八九二）と述べているのである。その根拠は未詳である。そこで我々はとりあえずは「光緒十七年」として考察を進め、その後で「光緒十八年」であった場合についても同じ方法で検討してみることにしよう。

ところでここでもう一つ問題になるのは、天文ソフトは当然ながら現代の太陽暦にしか対応しておらず、この「光緒十七年九月二十八日」という太陰暦の暦日には対応していないことである。年号を西暦に変換する

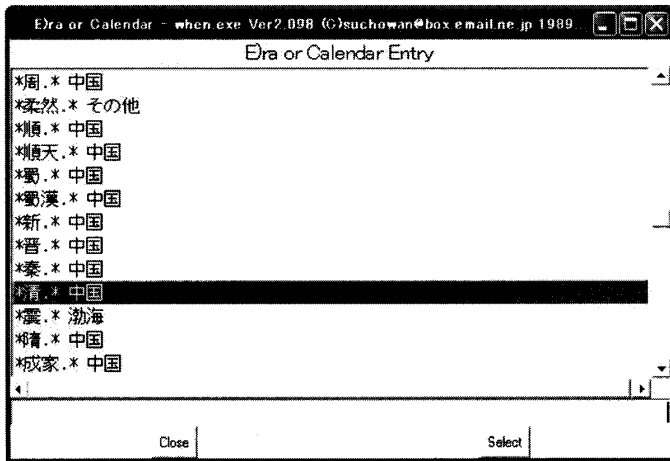


図 4 - 1

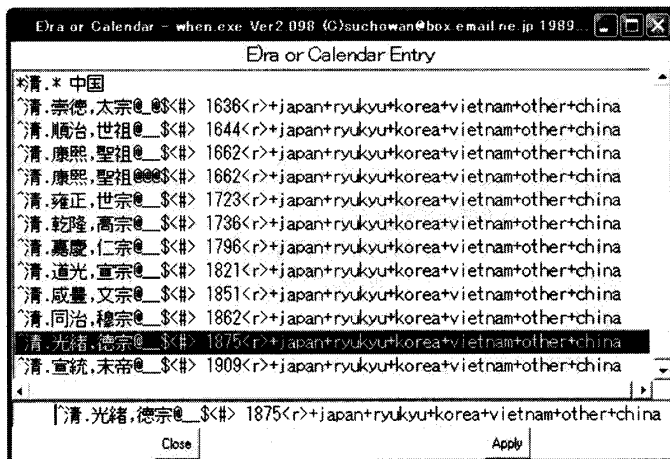


図 4 - 2

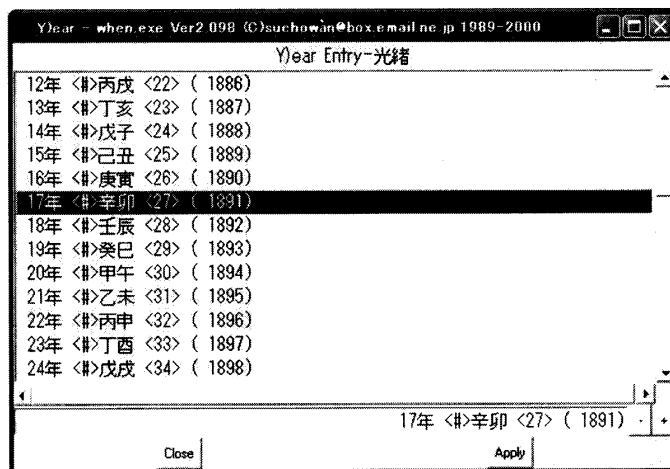


図 4 - 3

ことは我々が日常行っていることであるが、この場合は月日まで正確に西暦の暦日に変換することが必要になる。この作業は年表などの書物によっては非常に面倒なのであるが、ここで活躍するのがやはりコンピュータソフトなのである。「暦変換プログラム when.exe」を使用して暦日を変換する過程を次に簡単に示しておこう。

【図2】は「when.exe」を起動した時の初期画面 (QUERY) である。起動時の日時がデフォルトで表示されている。【図3】はそこに「光緒十七年九月二十八日」という暦日データを入力し終わった状態を示している。

それぞれの入力情報の選択方法は以下のとおりである。【図2】と【図3】における「INPUT」の「Era or Calendar (年号や暦法)」「Year Number / Kansi (年数 / 干支)」「Month (月)」「Day Number / Kansi (日 / 干支)」「Followups (追加)」をそれぞれ順にクリックすると【図4-1】〜【図4-6】のエントリー画面が起動する。それぞれのエントリー画面から必要な条項をクリックして選択し、下の「Select」や「Apply」で確定する。それが【図3】の入力画面に順次反映されるのである。ちなみに一番下の段の「Followups」という欄は補足情報を入力する場所が必要になれば空欄で構わないのだが、ここでは参考のために【図4-6】のようにその日の「日の入り」時刻を要求してみた。このようにして

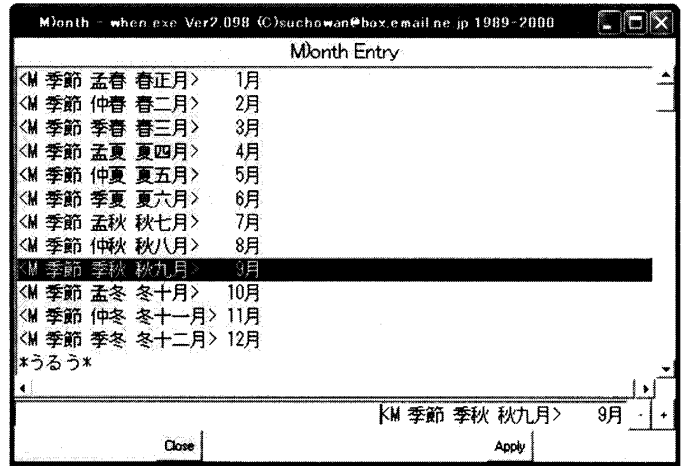


図 4 - 4

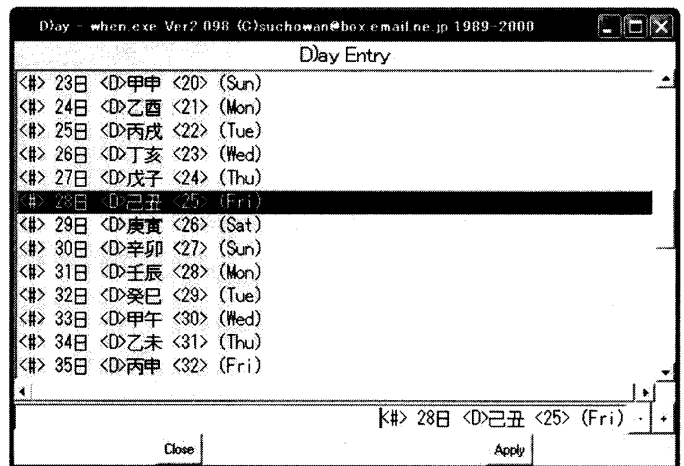


図 4 - 5

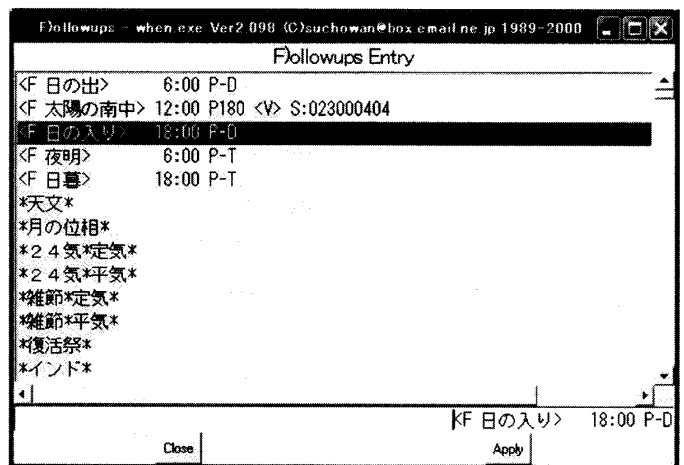


図 4 - 6

【図 4 - 1】と【図 4 - 6】の作業を終えた状態が【図 3】である。【図 3】の画面だけでも「光緒十七年」の干支が「辛卯」であり、その九月二十八日の干支が「己丑」であることが明示されていることが分かるだろう。ある年の干支は従来の工具書によっても容易に知ることができたが、ある月日の干支を調べることは書籍の形では大変困難であった。それがこのプログラムによって簡単に検索できるのである。東洋学研究にとって欠くべからざる便利なプログラムであることは言うまでもなからう。

さて必要な情報が入力されたところでいよいよ【図 3】の上方の変換ボタン (When) をクリックする。すると【図 5】のように変換結果 (When Execution Result) が表示される。

光緒十七年九月二十八日

は現在我々の使用している太陽暦 (グレゴリオ暦) では

一八九一年十月三十日

にあたる。ちなみに日本の年号では

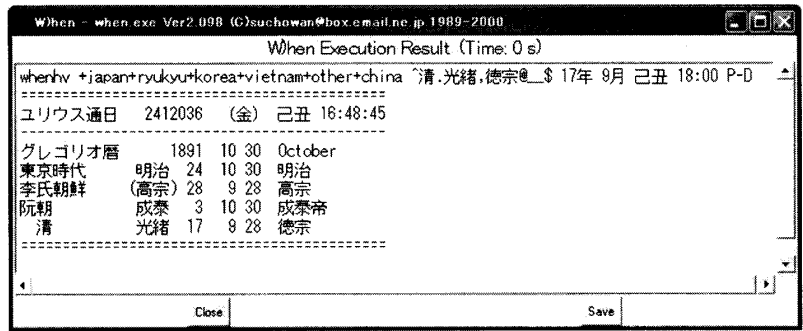


図5

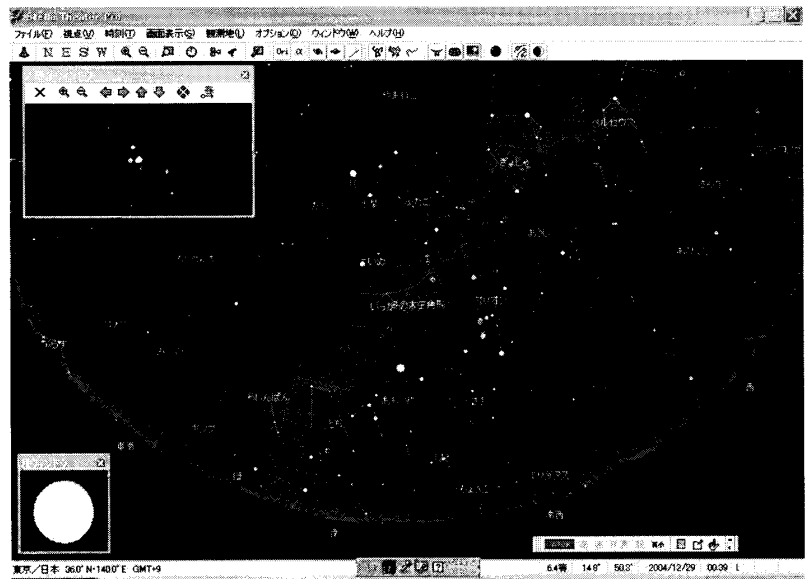


図6

究に裏打ちされていなければできない仕事であり、まことに驚嘆に値しよう。

3、天文ソフトを用いた検証

では以上で得られた情報を天文ソフトに入力してみよう。ここで使用したのは「Stella Theater Pro」⁽⁶⁾である。ウェブ上からダウンロードできる各種天文ソフトの中で、⁽¹⁰⁾操作も容易、且つ様々な機能が充実している点からこれを選んだ。天文学に詳しい知人によるとデータの正確さは保証できるといふ。【図6】は「Stella Theater Pro」を起動させたところである。デフォルトでは起動した日時 of 天球が表示されるようになっており、

明治二十四年十月三十日
 ある。また「16:48:45」とあるのは先ほど「Followups」で要求しておいたこの日の東京における日の入り時刻である。

この「when.exe」ではデフォルトの出力情報は「ユリウス通日」「グレゴリオ暦」及び日本・朝鮮・越南・中国の年号となっているが、【図2】【図3】中ほどの「Output Calendars」をクリックすることにより、様々な暦法を選択して出力させることができるようになってくる。ところがここで扱える暦法の種類が実に膨大で、古今使用された世界各地の暦法が網羅されている観がある。日中朝越の年号は言うに及ばず、「ユリウス暦」「グレゴリオ暦」「イスラム暦」「ユダヤ暦」「マヤ暦」「チベット暦」「ヒンドゥー暦」「エジプト暦」「ローマ暦」「タイ暦」「ジャワ暦」「バリ暦」「フランス共和暦」や「節月」「四分暦」「太平天国暦」等々、さらには各国皇帝の「在位表」までが用意されている。確固たる暦法研

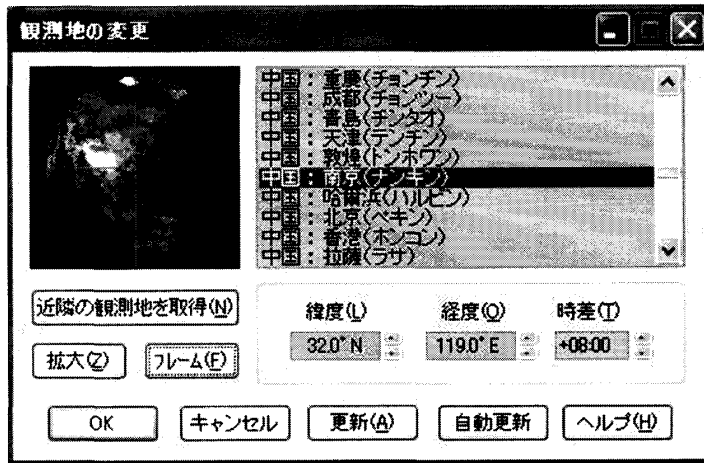


図 7

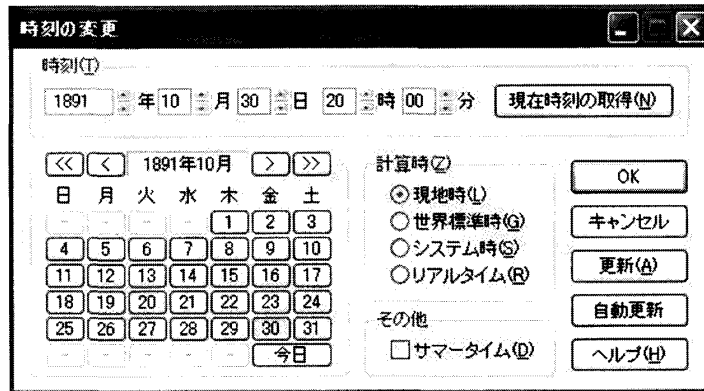


図 8

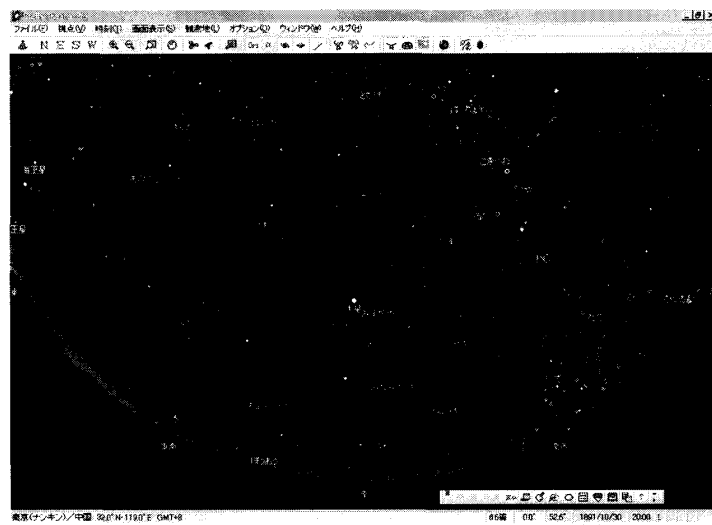


図 9

月の満ち欠けを表示する「月ウィンドウ」や、惑星の位置関係を表示する「太陽系ウィンドウ」も表示されている。観測の方角や画面の表示倍率も自由に変更できるし、過去や未来の任意の時刻における天空を表示できる。「デモ版」では「紀元前九九九九年一月一日」から「西暦九九九九年十二月三十一日」までの任意の時刻が設定でき、我々の目的には十分すぎる性能だ。もちろん日食や月食といった天文現象も再現できるし、追尾モードで任意の天体を自動的に追いかけることもできる。使っていて殊に楽しいのは星座のイラストや星座物語を見ることができ、そして時間帯によって昼光や薄明・朝焼け・夕焼けを表示できることであろう。また星の検索機能も充実しており、特に中国の「星宿」の検索は我々中国学の研究者にも非常に有益である。

さて本稿の目的においては「観測地の設定」「日時の設定」「視点(観測する方角)の設定」という三つの操作が必要となる。まず観測地は「南京」である。「観測地」コマンドから「観測地の変更」を選択する。本ソフトでは世界の主要都市は特に経緯度を指定せずとも、あらかじめ登録さ

れているリストから選択することができる。【図7】は「観測地の変更」ダイアログから「南京」、即ち北緯三十二度、東経一一九度を選択したところである。

続いて日時を設定する。「時刻」コマンドから「時刻の変更」を選択する。【図8】は「時刻の変更」ダイアログから問題の年月日「一八九一年十月三十日」及び時刻「晩間八点鐘」即ち「午後八時（二十時）」を選択したところである。そして観測する方角は「南隅」である。「視点」コマンドから「南」を選択する。そして表示させた結果が【図9】である。キャプチャー画像ではわかりにくいので、印刷コマンドにより出力した星図を【図10】に掲げる。

さて、いかがだろうか？ この日、この時間に南京から見た南の空には何が見えたのだろうか？ そう、木星である！ ほぼ南の方角約一七七度・仰角約四十八度に、木星が見えていたのである。そうするとここに、「赤燄騰空」の記事で南京の人々が目撃した謎の光はUFOでもなければ他の怪奇現象でもなく、木星の輝きであった可能性がにわかには浮上してくるようになったのである。

ところで先ほどの「光緒十八年」説を採った場合はどうだろうか。念のために同じ手順で確かめてみよう。

光緒十八年九月二十八日

はグレゴリオ暦では

一八九二年十一月十七日

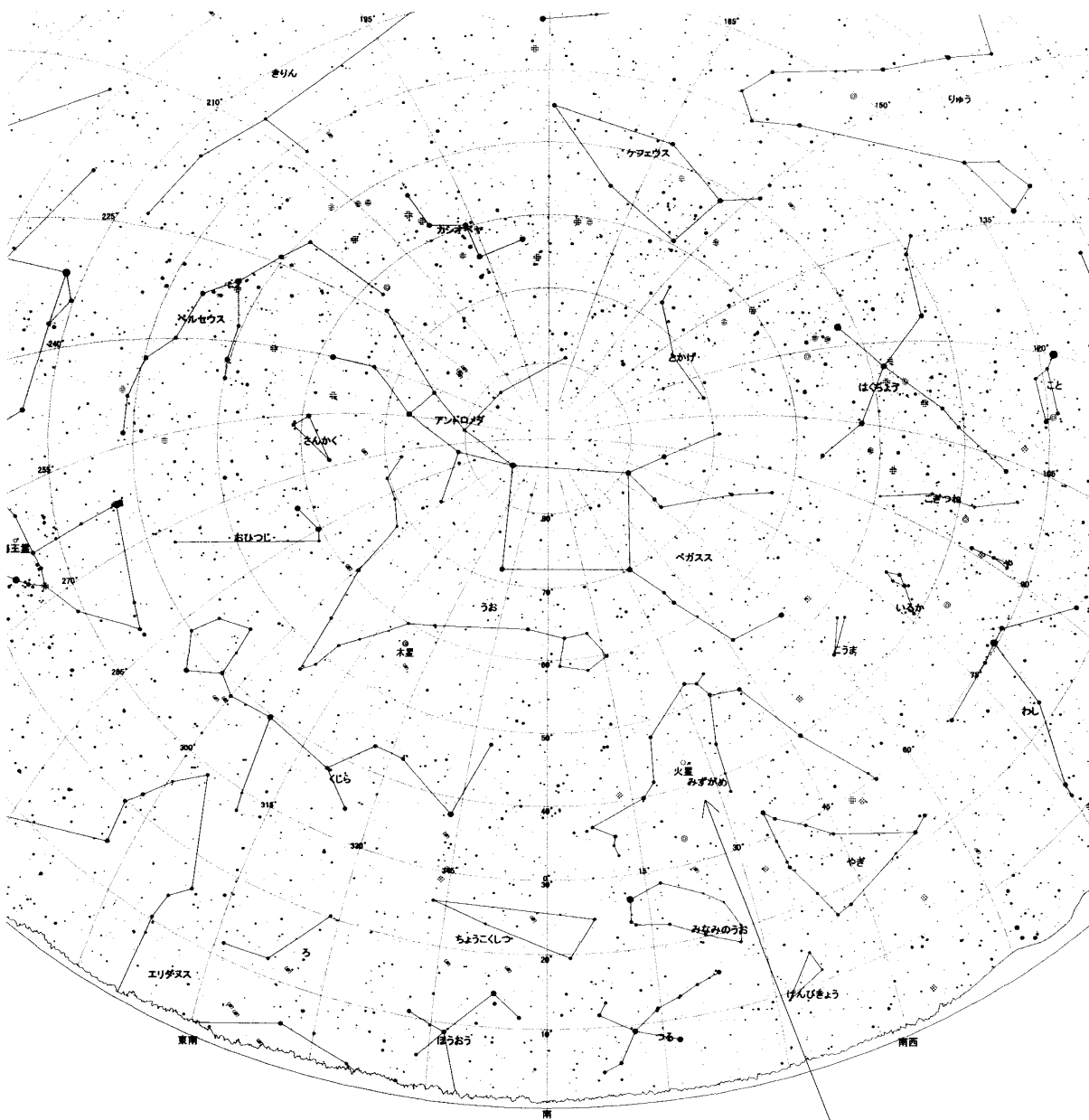
であり、これは日本の年号では

明治二十五年十一月十七日

に当たる。このデータを「Stella Theater Pro」に入力し、その結果をプリントアウトしたのが【図11】である。いかがだろうか。全くの偶然だが、この場合も「南」と言ってよい方角に火星が見えているのである。具体的には方位約二〇六度（ほぼ南南西）仰角約四十三度である。よって「光緒十八年」説の場合にも同様に、この怪光が火星であったという解釈が成立することになる。

4、「UFO説」と「木星説」

南京の人々が目撃したのは木星であった。こう言うとUFO信者の方々はもとより一般の方々からも、いくらなんでもただの星をUFOや謎の怪光と見間違えるはずがない、という反論が返ってきてきそうだ。しかし実際にそういう事例はしばしば起こっている。有名な例はカーター元アメリカ大統領がUFOを目撃したという事件である。これについて前掲『中国文化故事物語』は次のように述べている。



ここに火星が見えている

図11 1892年11月17日夜8時の南京の空

一一一

一九七三年のある夜、カーターはアメリカのジョージア州のリアリで大衆団体向けの講演をおこつた。その時、彼は約二十人の聴衆と共に、空を飛ぶ光っているものを目にしたのである。それは、今まで見たこともないほど明るく、月ぐらいの大きさで、変色する珍しいものであった。誰もそれが何なのかわからなかったが、十分ほどずっと見ていた、とカーターは言っている。そして、大統領選挙の間に「私が大統領に選ばれたら、UFOがアメリカに現れたことを大衆と科学者に発表する」と公然と発言した。この発言と経験は、彼の息子やホワイトハウスのスポークスマンによっても証言されている。

しかし残念ながら、この事件の謎は現在ほぼ解明されたと言つてよい。UFOに関する懐疑主義的研究の大家、「と学会」の志水一夫氏は著書『トンデモ超常学入門』¹¹で次のように解説しておられる。

カーター元大統領が、まだ大統領候補であった頃、「私はUFOが実在すると確信している。なぜなら私も見たことがあるからだ」と語つたと報道されて、人々を驚かせたことがあつた。

しかし残念ながら、彼がUFOだと思つたものは金星だったというのが、現在ではほぼ定説となつている。

と言うのは、UFO否定論者として名高い米国の研究者、ロバート・メリル・シェイファー（一九四九〜）が詳細に調査を行ったところ、まず彼が見た日に開催されたと言うジョージア州リアリーのライオンズクラブの会合は、彼が言うように一九六九年の十月ではなく同年一月六日で、当時彼がUFOを見たという位置には金星が見えていたということがわかつたのである（つまり、もしそれが本当にUFOだったのなら、そのすぐそばに金星も見えていたはずである）。しかも、それが本当にUFOのような特異な物体であったならば、その時に一緒にいた人々の印象にも残つていと思われぬのに、覚えていたのはクラブの会長一人だけで、しかも彼もそれが金星だった可能性を認めたと言う（Sheafer, Robert, Merrill. *The UFO Verdict: Examining the Evidence*. Baffaro, NY: Prometheus, 1981）。

こういうわけで、現在ではこの目撃は、カーター氏にはいささか気の毒ながら、むしろ目撃者の社会的信用度と目撃者としての信頼性とは**必ずしも一致しないという代表的な実例**になつていのである（太字原著のママ）。

この事件はUFO信者によつていまだにVIPによるUFOの目撃例として取りざたされるのであるが、どうもUFO信者の方々はこうした批判的研究の存在はとんとご存じないらしい。いや、それどころか、異星人によるアブダクション（誘拐）事件としてもはや伝説化している感のある、異星人によつて円盤に連れ込まれて身体検査をされた記憶を後から催眠療法により思い出したというあの「ヒル夫妻事件」も、そもそもの発端は惑星の見間違えだろうということになつていのである。これについては高倉克祐氏の『世界はこうしてだまされた』¹²《さらばUFO神話》¹²や、と学会著『トンデモ超常現象99の真相』¹³などに詳しい。後者において「と学会」会長の山本弘氏は、前掲のシェイファーを引用しつつ次のように述べておられる。

シェイファーはまた、夫妻が見たUFOの正体は木星だったのではないか、とも言っている。というのも、ペティは「最初、月の近くに明るい星が一つ見えた」と言っているのだが、当日、月のそばには二つの明るい星があったのだ。木星と土星である。木星はきわめて明るい、め、よくUFOと間違えられる。もし夫妻の見たUFOが木星でなかったとしたら、「月の近くに明るい星が二つ見えた」と言わなければおかしい。

単調な道路を長時間ドライブしていると「ハイウェイ・ヒプノシス」と呼ばれる催眠状態に陥ることがある。運転中に幻覚が見えてくることがあるのだ。深夜、他の車のほとんど通らない山道を何時間も走っていたヒル夫妻は、ひどく疲労していたはずで、ハイウェイ・ヒプノシスに陥っていたとしても不思議はない。明るく輝く木星が、幻覚を生む引き金になったのかもしれない。(太字原著のママ、傍点明木) それにしてもあれだけ騒がれた事件のそもそものきっかけが惑星の見間違えだった、というのだから拍子抜けしてしまう。いや、それよりむしろ、有名なUFO事件もふたを開けるとこんなものだ、ということの方が逆にドラマチックだと言えるかもしれない。前掲の『中国文化故事物語』は「ヒル夫妻事件」について

ああ、奇妙な出来事は、いつも人類の常識を超えている。

と手放して感動しておられるのだが、今となつては気の毒なほどに滑稽である。

また今日でも惑星を見てUFOだと言い出す人は日常的にいるようで、国立天文台広報普及室で一般からの電話質問受付を担当されていた天文学者長沢工氏の著書『天文台の電話番』¹⁴には次のような話が載っている。

科学的な立場でものを見ること、これは一般生活の上でもたいへん重要である。……(中略)……西の空に輝く金星を見て、

「UFOが見える」

と連絡してきたり、

「太陽の光度が日に日に増している。このままにしておいたら大変なことになる。天文台はこんな大切なことをなぜ隠しているのか」

と詰問口調で電話してきたり、そんな人も決して珍しくない。ごく当たり前の存在である金星を考えずに、なぜUFOを思い浮かべるのか。

天文台の情報を否定し、出所の怪しげな噂の方をなぜ信じるのか。ほんの少し冷静に、科学的に考えればあり得ないような話をコロツと信じるのは、ある意味で、科学的思考が根付いていないために他ならない。

天文台に電話をかけてくるのは、世間一般からみればごく一部の人であろう。当然のことであるが、それが日本全体の考え方を代表しているわけではない。したがって、そこだけから全体の傾向に判断を下すのは「一斑を見て全豹を卜す」¹⁵たぐい、「針の穴から天井をのぞく」に類したこともかもしれない。それでも私は、そこから、科学的、合理的な判断の欠如の広がりを感じようねりのように感じとっている。(天文

台の電話番号」15〜16頁)

また、惑星の「合」(二つの惑星が見かけ上接近すること)の起こる夜についても、次のように述べておられる。

いずれにしても、これらの惑星の合はかなり頻繁に起こる。夕方の見やすい位置でこれらの惑星の合があると、

「UFOが見える」

とか、

「昨夜、西の空に明るく見えたのはUFOではありませんか」

などの問い合わせ電話が、天文台に何回もかかってくる。(「夕暮れの木星、金星の接近」35〜36頁)

それにしてもこんな電話まで受けねばならないとはまことに苦勞である。そういえば右の「ヒル夫妻事件」の引き金になったのも、まさしく木星と土星の「合」であった。

さらに私が長沢氏からいただいたお手紙の中で、ある航空会社からパイロットが目撃した怪光について問い合わせがありそれが金星だったと分かったという話、また米空軍のジェット戦闘機が金星を必死で追跡したことがあるという話などを教えていただいた。こういうことも起こるときには起こるものなのである。さらに長沢氏は、中には正体の分からないままに終わった光もあったが、それは単にその時分からなかったというだけで、べつに即それが超自然現象だったとは言えない、ともおっしゃっている。我々はこのことをゆめゆめ忘れてはならない。

金星・火星・木星といった惑星はマイナス2〜4等星という、非常に明るく見える天体である。そのつもりで実際にご覧になると分かるが、まだ明るさの残る夕方の空でも着陸灯など航空機の外部灯火かと思まがうほどに明るく見ることがある。よく見ると動いていないので、あ、飛行機ではなくて星だな、と気づくこともあるほどだ。「赤燄騰空」のような例では、回りの人が「あれはなんだ？」とパニックを起こしているその場の雰囲気の人々が次々に巻き込まれてしまう、という集団心理も働いている。私自身も、回りの人々が大騒ぎをしている状況で「あれは星ですよ」と指摘できる冷静さを保ち得るか、あるいは「あれは星ですよ」と声を上げる勇氣を持ち得るか、となると全く自信がない。さらに現代のマスコミでも『呉友如画宝』の時代の絵入り新聞でも、記者が事件の後にわざわざ取材を行った場合、どうしても人々の証言が大きさになることが考えられる。あるいは取材を受けた人々がそれに応えようとする過程で、もっともらしい記憶が後付けで再構成されてゆくということもあるだろう。いずれにせよ木星のような明るい惑星をUFOなどの怪異現象と勘違いする事例は決して珍しいことではなく、むしろ起こり得ることだと
言うべきなのである。

以上の検証によりこの「赤燄騰空」は、中国へのUFO飛来の証拠ではなく、UFOの正体が天文学的に論証できたという幸運な事例として認められることにな……ればよいのだが、なかなかそう簡単には行かないだろう。では「赤燄騰空」に記された時刻と方位に木星が見えていたことを発見した我々は、これをUFOだと主張する論に対してどのような態度で臨むべきなのであるか。これは木星に間違いのない、勝負あった、と宣言したいのはやまやまではあるが、ここでは最終的な結論付けは慎重に避けておきたい。これが木星だと頭から決めつける態度は、木星だ、いやUFOだ、という不毛な水掛け論に巻き込まれる可能性があるからである。もちろん人にもよるのだが、一般にUFO信者の方々の自説への執着は非常に強い。純粹に学問的な議論は期待できそうにない。

さらに我々は木星の存在を突き止めはしたが、南京の人々が見たのが即ち木星であったということ、つまり木星以外には他に何ら目立つ発光体が無かったということまでが証明できたわけではない。一般の読者からすると、この怪光はUFOだ、いや木星だ、というつばぜり合いを見せつけられれば、どっちもどっちだと見られてしまうのが関の山である。また拙論「其一」でも触れたように、この正体は木星だと声高に主張しようものなら、「夢がない」のひと言で片づけられる恐れさえあるのである。これぞ「夢による言論統制」だ。もともと、UFOだと言われていた話を天文学のデータを使って謎解きをすることの方が、私にとってはよほど「夢のある」話なのだが……

そこで我々の「UFO＝木星説」を、これに不利な条件まで含めていまま少し慎重に考察してみることにしてしよう。まず南京でのこの日の日の入り時刻は「十七時十八分」前後である。問題の八点鐘（二十時）頃は日没後三時間近くを経ているので十分暗くなった時間帯だと思われる。「赤燄騰空」の本文に「天色は昏暗」とあるのに符合する。

ではこの日、木星は何時に空に現れて何時に地平線に没したのであるか。前掲「Stella Theater Pro」によると、日没時間前後には既に東南の方位に見えていたことが分かる。より詳しく言うと、この日木星が東微南の地平線から出てくるのが「十四時三十三分」頃。もちろん昼間であるから全く見えない。日没が「十七時十八分」頃。そして木星が西微南方向の地平線に没するのが「一時五十分」頃。つまり木星はこの日の夕方空が暗くなる頃から深夜二時前まで、東南から西の方位にかけて常に見えていたことになるのである。「赤燄騰空」の本文を思い出してみよう。「晩間八点鐘時、金陵の城南の隅に、忽として、火毬の一団見ゆ」であった。つまりこの時突然この怪光が現れたような書き方がなされているのである。そうすると、木星は日没から夜中まで一貫して空に見えていたのだから夜の八時に突然出現した光は木星ではない、という反論も可能となってくる。

またこの日に限らず、天候を考慮しなければ木星はこの時期ずっと見ることができたようで、前後一か月間の二十時のデータを確認してみても、

南南東から南南西の方角、仰角四十五〜四十八度の高さに毎晩現れているのである。だとすると、この「赤燄騰空」の記事の日に限って目撃された光は木星ではない、という反論が同様に可能となってくる。

同様に「光緒十八年」説の場合を確かめてみると、この日の日没時「十七時〇六分」頃には火星は既に東南方向に見えており、そして「零時十九分」頃に西南西方向に没する。つまり火星はこの日の夕方空が暗くなる頃から夜中の零時過ぎまで東南から西南西の方角にかけて常に見えていた。ゆえに夜の八時に突然出現した光は火星ではない、という反論が可能である。またこの前後の時期は毎晩火星を見ることができた。この日の前後一か月の二十時のデータに限ってみても南から南西の方角、仰角四十二〜四十四度の高さに毎日見えている。よってこの記事の日に限って目撃された光は火星ではない、という反論が可能である。

但しこれらのことは「木星説」を完全に否定するには足りないのではないか。「赤燄騰空」の本文には「維時浮雲空を蔽ひ」とある。浮雲と言うからには雲が天を覆う曇天ではなからう。この日の木星は雲の間から見え隠れしていた。雲間から出てきた木星に誰かが気づいて騒ぎ始めたのがたまたまこの日の八時だったという解釈も可能である。また雲とは関係なく、誰かが木星に気づき、それが集団心理によりパニックになった時間がたまたまこの日の八時だったと考えることもできよう。

また「赤燄騰空」の本文にはこの光が動いていたことを示す表現がいくつもある。「西よりして東し」「其の行くや甚だ緩なり」「近きよりして遠く」「転じて東に向ひて去れば」などである。本当に動いたのなら星だとは言えまい。しかしこの晩は雲が出ていて、それが風で動いていたとすれば、止まっている星が動いて見えることはあり得る。もちろん実際の木星は東から西へと動いているのだが、星の動きは目の前で動いて見えるほどの速さではないので、やはり動いて見えたのは雲との関係ではなからうか。もつともこの晩は「風は北に向ひて吹く」であったのに対してこの光は「転じて東に向ひて去」っているので、方角に矛盾はあるのだが、まあこういう事件についてマスコミに証言する興奮した目撃者が必ずしも冷静に真実を伝えるとは思えず、決定的な反証にはなり得まい。さらにこの光は「一炊許にして漸く遠く漸く滅す」「有よりして無」とあるようにしばらくして消えてしまったようだが、これについても木星が地平線に没するまでにはこの二十時からまだ六時間近くあったわけで、とても「一炊許」とは表現できないであろう。この光は地平線に没したのではなく、やはり雲に隠れてしまった可能性が高い。

また「形は巨卵の如く、色は紅にして光無し」という表現も気になる。木星がいかに明るく輝いていようと、形状を云々できる大きさではなからうから、これも「木星説」には不利な条件である。色が「紅」だというのはどうだろう。大気の状態によっては約四十三度という高さでも、赤みを帯びて見えることがあるのだろうか。識者のご教授を待ちたい。但しここでは目撃者がこの光を「火毬」という印象で見ているわけで、そうすると「火毬」に引きずられて「紅」という証言が出てきたとも考えられる。「光無し」というのは、赤いものが浮いているだけでピカピカ光ってはいないということだろうから、惑星を見間違えた場合に符合する表現であり、むしろ「木星説」に有利な条件だとも思える。またここに登場

する証言者が「流星」や「天灯」を連想している点からも、丸々と巨大なものではなかったことを想像させ、これも「木星説」に有利である。

こうしたことを言うとUFO信者の方からは、この光の正体を無理矢理木星だとこじつけようとしていると批判されそうである。ただ私には、右のような不利な条件を考慮しても、なおも「UFO＝木星説」は否定できないように思える。いやむしろ、この「赤燄騰空」の事件は考えれば考えるほど、UFO事件史上にしばしば見える典型的な誤認事件にそっくりに思えてしまうのである。ここに登場する三つの証言など意地悪な見方をすれば、現代のワイドショーや週刊誌に出てくる目撃証言そっくりだ。

「流れ星が流れたんだよ」。

「いや、子供が天灯を揚げていたんだ」。

など、いかにもインタビュアーに対して興奮して自説を述べ立てる口ぶりである。またおじいさんの証言もなかなかふるっている。

「それが初めて飛んできたときにかすかに音がしたような気がしたよ。静かにしていないと聞こえないような音だったけどね」。

しかし「赤燄騰空」の本文や絵によると、黒山の人がわいわいと騒いでいる状況だったようで、そんなに小さな音が聞こえたとも思えない。これも混乱した状況で興奮しきった人々の口からいかにも出てきそうな証言で、今日のワイドショーや週刊誌などにもありそうな典型的な目撃証言だと言えよう。

さて、重箱の隅をつつくような話はこれくらいにしておこう。実は私がここで確認しておきたいことは別にある。つまりこの話をいかにUFOの存否の議論の流れの中にいかに位置づけるか、ということなのである。

繰り返しになるが、この謎の光がUFOを含め何らかの異常現象や超常現象であるということ論ずるためには、何はさておきまずこの光が天体などの自然現象ではないということを確認しておかなければならない。もちろん、仮に自然現象ではないと言えたところで、それが即ち宇宙人の乗った宇宙船だということにはならないのは当然だ。言い方を変えればつまり、「木星説」が否定されれば即「UFO説」が成立することはあり得ない、ということであり、さらにそれを逆に言えば、「UFO説」が成立するためにはまず「木星説」が十分に疑わしいということが必要条件となるのである。

私がついている立場は「懐疑主義」である。UFO説話を全て信用する気はさらさらでない。かと言って頭ごなしに全て否定するつもりも決してない。十分な証拠と正しい論証で納得させてくれるなら信用するにやぶさかではない。但しきちんと調べてみて、立論に嘘やごまかしがあったら許しませんよ、という立場、もしくはそうした考証を知的に楽しむという立場である。そうして我々は右に見たように、自分の手と頭を動かして、その時刻その場所に木星が見えていたことを突き止めてしまった。そしてそれは「UFO説」を直接に否定するものというよりも、「UFO説」を主張するためには「木星説」が障壁になりますよということを「UFO説」側に突きつけた、というところに意味があると私は考えるのである。

これをUFOの存否の議論の流れに位置づけるならば、まず中国のUFO研究者は「赤燄騰空」という記事を見出してこれを当時目撃されたUFOの記録だと主張した、それに対して我々懐疑派はその時刻その方角には木星が見えていたことを見出した、そのために今度は「UFO説」を主張する人々の側に反論の順番が回ったことになる。そして彼らがなおもこの光がUFOなどの超自然的なものだと主張しようとするならば、まずその前提としてUFO研究者の側はこの光が木星ではない、あるいは木星以外に光を放つものがあつたということを説明しなければならなくなった、というわけだ。つまり立証責任が「UFO説」側に移ったということなのである。議論のキャッチボールはUFO信者に投げ返された。次はUFO信者側が答える番なのだ。

ここで注意しなければならないのは、「説明がつく」ということと「証明された」ということは天と地ほど違うということである。「赤燄騰空」の事例はUFOであると考えれば全て説明がつく……。ありがちな言い方である。しかしそれならば「木星説」も十分に「説明のつく」解釈なのであつて、その意味では百歩譲つても条件は同じなのである。否、物証があるという点では「木星説」は「UFO説」より若干「証明」に近い、と言わせていただいても、まんざら傲慢とは言えまい。もちろん「夢」だの「ロマン」だのという話を土俵に持ち込むのは禁じ手である。

現代中国ではUFOの目撃例が増えている。曰く、宇宙人は地球の代表としてアメリカを見限り、経済発展めざましい中国を新たな地球代表として選び、さかんにコンタクトしようとしているんだそうな……。⁽¹⁵⁾ 本当に多数のUFOが中国に飛来しているのか、それとも疑似科学により知恵を付けられた人々の目が見てしまったのか、定かではない。ただ私を見る限り昨今の中国ではどうも、UFOに乗って異星人が地球に来ているということが既成の事実と見なされている雰囲気濃厚なのである。そして日本の少年誌では今日とんと見かけなくなった、どこか懐かしいUFOの元気な姿をあちこちで少年向け出版物に見ることができると。どちらかと言えば日本では精神世界のネタとなつてしまったUFOが、中国ではまだ科学のノリなのである。

中国には懐疑主義的研究も、また「と学会」のようにこうした「トンデモ本」にツッコミを入れながら知的に楽しむという態度も、まだまだ育っているとは言えない。中国にUFOが飛来していた動かね証拠としての地位を固めつつあるこの「赤燄騰空」図に対する私の検証が、どのくらい受け入れてもらえるか興味あるところである。実は現在右に述べたような考証を中国語に訳して、中国の主要なUFO研究者にお送りしてご意見をうかがう準備をしているところである。さていかなることになりますやら、結果はまた追ってご報告したい。願わくは、実りある議論の成立せんことを……。

注

- (1) 「古代中国に UFO は飛来していたか? (其二) — 古典文献の基本的な使い方からの考察」『中京大学教養論叢』第四十二巻第四号 二〇〇二年三月
- (2) 前稿「古代中国に UFO は飛来していたか? (其二) — 古典文献の基本的な使い方からの考察」(中京大学文化科学研究『文化科学研究』Vol. 13 No. 2 二〇〇二年三月)の文末において、「其三」の予告を次のように示しておいた。
(次号目次)
- 五、UFO にさらわれた中国人? 地方志の記述
- 六、付論: 現代中国の UFO 研究団体について
- ところがいくつかの地方志資料に未だ十分に調査の至らない部分があるのでこれは次号以降で取り扱うこととし、本稿では予定を変更して呉友如の「赤鯀騰空」を論ずることとなった。お詫び申し上げる。
- (3) 『呉友如画宝』中国青年出版社 一九九八 第四冊「名勝図」第十二集上より
紅蜻蜓小舖
<http://www.redup.com.tw/>
- (4) 平溪天灯節
<http://gis.tpc.gov.tw/Human2/Tourism/Festival/mon2-2.htm>
平溪天灯之家
<http://myweb.hinet.net/home6/angel0512/>
などを参照。
- (5) 同じような手法で、中国古典文献の解釈に天文ソフトを用いた研究に福島久雄著『孔子の見た空』(大修館書店 一九九七)がある。ここで用いているソフトウエアは Astro Arts 社製「ステラナビゲーター」である。
- (6) 王矛・王敏共著『中国文化故事物語』原書房 一九九〇(14) 古代中国に UFO]
- (7) URL 等については拙論其一を参照されたい。
- (8) suchowan 氏製作「暦変換プログラム when.exe」(フリーソフトウエア)。suchowan 氏のウェブサイト
[suchowan's Home Page]
<http://www.asahi-net.or.jp/dft-sg/index-u.html>
<http://hosi.org/a/index.html>
にてダウンロードすることができる。同サイトは暦変換プログラム以外にも天文・暦法に関する情報が満載されている。
- (9) Tox Soft 社製「Stella Theater Pro」(シェアウェア)。Tox Soft 社のウェブサイト
<http://www.toxsoft.com/>
にてダウンロードすることができる。なお同社からは簡易版の「Stella Theater Lite」(フリーウェア)も公開されている。またウェブサイト「Stella Theater Web」では、オンラインで様々な星図を表示することができる。
<http://www.stellatheater.com/>

- (10) ちなみに同種の天文ソフトとしてはMars Technologies社製「Red Shift」が有名である。
<http://www.maris.com/content/?id=20>
 その他の天文関連ソフトについては「アストロサーチ」
<http://astro.chimons.org/>
 を参照。
- (11) 志水一夫著『トンデモ超常学入門 志水一夫の科学もドキ』データハウス 一九九七
 第一部 トンデモUFO学入門 「迷信その3・カーター元大統領は、UFOを見たことがある」
- (12) 高倉克祐著『世界はこうしてだまされた《さらばUFO神話》』悠飛社 一九九四
 第四章「UFO遭遇事件の真相」・ベティ・ヒル事件の真相
- (13) と学会（山本弘＋志水一夫＋皆神龍太郎）著『トンデモ超常現象99の真相』洋泉社 一九九七
 「ヒル夫妻は空飛ぶ円盤に誘拐され、身体検査された!？」（山本弘）
- (14) 長沢工著『天文台の電話番号 国立天文台航法普及室』地人書館 二〇〇一
- (15) 集英社『週刊プレイボーイ』二〇〇四年四四号（十一月二日号）『中国UFO大量飛来』には理由があった!？」参照

※拙論執筆の過程で、『天文台の電話番号』の著者長沢工氏からはわざわざお手紙を頂戴して色々お教えを賜った。また呉友如に関しては北海道大学の武田雅哉氏、佛教大学の若杉邦子氏から貴重なご助言を賜った。この場を借りてお礼申し上げる。